ドイツにおける初期の幼稚園保育者養成

Early kindergarten teacher training in Germany

オムリ　慶　子 *

Abstract

This paper outlines the fundation of our study: Research C (issue number 26381054) which will be conducted from 2014 to 2016, entitled "Japanese modern early childhood education as seen from the kindergarten introduction process in foreign countries: a new perspective on early childhood education history"

In this study, we set an enomous goal of developing a new and concrete historical perspective on early childhood education aimed at the fusion of practice and history.

The study is structured as follows:

1. Kindergarten teacher training schools and the curriculum in Germany

1-1 The era of Friedrich Froebel

1-2 From the death of Froebel to the end of the 19th century

2. Activities of German teachers and kindergarden teacher training in foreign countries

2-1 USA, 2-2 Italy, 2-3 Japan.

キーワード：ドイツ幼稚園保育者養成、ドイツ人保育者、幼稚園運動

はじめに

本稿は、2014年度から16年度にかけて行う基盤研究 C（課題番号 26381054）、研究課題名「諸外国における幼稚園導入過程から見た現代日本の保育―新しい保育史観の試み―」を進めていくうえでの研究の見通しをスケッチするものである。

発端となったのは、2011年頃から、この研究の研究分担者との議論の中で、海外の幼児教育メソッドが誕生した歴史的・社会的背景等を考慮せずに無批判に日本の現場に取り入れている現状や、海外の幼児教育メソッドというだけで手本とすべき対象ととらえている論調に危惧を抱いたことから始まる。そして2012年と2013年の日本保育学会で、研究分担者らとともに「外国の教育方法を日本に導入する時の課題と検討」と題した自主シンポジウムを行うなかで、もう一つの現状が問題意識として浮かび上がってきた。それは、現在日本の保育者養成では、現場に直結する実践に重きが置かれる傾向にあり、その根本となるべき保育の思想や歴史の教授が希薄になりつつあることである。多くの保育者養成校では、「即戦力」や「即実践力」が合言葉のように、実践力をつけることが最重要事項となっており、思想や理論の教授が二の次となっている傾向がある。そしてこの時の思想や理論も、実践にすぐに役立つ現在の思想や理論であり、その思想や理論に至る源となるはずの保育の歴史や歴史的保育思想は実践に結びつかないものとしてわきに追いやられてしまっている。また逆に、保育思想や保育史がそれのみで完結してしまい、現場の実践との橋渡しができていない現状もある。

現在日本の学術研究を概観すると、保育思想や保育史が保育実践とつながりのないところで研究されていたり、また実践研究では実践報告や統計調査などの思想的バックグラウンドが非常に限られたものでしかない場合が見受けられる。現状の保育現場を見ても、「即実践力」を持った保育者として仕事に就いたものの、数年たつと自分の立ち位置を確認できないまま日常の実践に右往左往している現状がある。長い保育史の中で培われてきた過去から現在に至る長いスパンの思想的バックグラウンドを失くした実践は、地図のない場所で自分の保育実践の道を

* Keiko OMRI　教育学部教授

見失うか、非常に限られた保育活動に始終してしまっているように感じた。

保育思想や歴史が現場の実践と橋渡しができていない現状は、保育思想や保育史を研究してきた我々の責任でもあることを自覚し、その状況を少しでも改善したいと考え、今回の基盤研究Cの申請を行った。

本研究では、現在日本の近代的幼児教育が幼稚園導入から始まったことを前提とし、日本と日本の幼稚園教育に影響を及ぼした諸外国の幼稚園導入過程を比較考察することによって、日本独自の変容の道筋を現在の保育実践に引きつけて明らかにし、保育者が自らの実践を保育史の中で確認できるような、実践との融合を目指した具体的で新しい保育史観を構築したいという大きな目標を掲げた。

本研究が日本以外に、イタリア、アメリカ、ドイツのフレーベル幼稚園研究を的にしたのは、日本最初の東京女子師範附属幼稚園保姆豊田芙雄がイタリアを視察し、当時のイタリアの幼児教育事情から少なからず影響を受けたこと[1]と、明治20年以降日本の幼稚園発展が、アメリカ人キリスト教宣教師によって日本各地に開設された幼稚園や保育者養成校に大きく影響を受けていること、そして両国の幼稚園運動の先鞭をつけたのは、日本における松野クララと同様、ドイツの養成校出身のドイツ人教師であったことからである。

本研究組織は、オムリ慶子（研究代表者・関西学院大学〔兵庫〕）、大森隆子（研究分担者・椙山女学園大学〔名古屋〕）、甲斐仁子（研究分担者・東洋英和女学院大学〔神奈川〕）、山田りよ子（研究分担者・藤女子大学〔北海道〕）、また連携研究者として荘司泰弘氏（常磐学園大学〔大阪〕）と、海外の研究協力者として、Rockstein, Margitta（ドイツ　バード・ブランケンブルク・フレーベル博物館）、Macchietti, Sira, S.（イタリア　アレッツォ宗教科学高等研究所）、Beatty, Barbara R.（アメリカ　ウェルスレイカレッジ）に依頼した。

オムリはイタリア幼児教育史を専門とし、現在は国際的に研究が立ち遅れているイタリアのフレーベル思想や幼稚園導入に関する研究を進めている。大森は折り紙に焦点を当て、日本の保育現場に教材として導入された経緯、当時の保育者たちの折り紙観や折り紙のルーツについての研究を進めている。また、甲斐はモンテッソーリ・メソッドのアメリカおよび日本の導入発展や、アメリカの就学前教育の教育課程や評価についての研究を進めており、山田は保育実践における「遊びと環境」に焦点をあて研究を進めてきている。連携研究者の荘司氏はフレーベル教育の特に教育遊具（恩物）を長年にわたって研究されている。また海外の研究協力者のRockstein氏は、世界で最初の幼稚園が開設されたドイツ、バード・ブランケンブルクのフレーベル博物館館長をされており、正統派フレーベル主義の継承に使命感を持ち取り組んでおられる。イタリアのMacchietti氏は、アレッツォ宗教科学高等研究所教授（前国立シエナ大学教授）で、イタリア幼児教育史に長年取り組まれ、またイタリアの幼稚園教育要領ともいえる母親学校指針の改定にも携わるなどイタリア教育省の委員を歴任されている。アメリカのBeatty氏は、ウェルスレイカレッジに籍を置き、近年アメリカであまり研究されなくなってきたフレーベル研究に取り組んでおられる。

以上のような各研究者の今までの専門性を生かし、オムリは保育者の役割、大森は折り紙等の教材、甲斐は保育者養成制度とカリキュラム、山田は保育内容に視点を置いて、ドイツ人教師たちが母国ドイツでどのような養成を受け、それをアメリカやイタリアや日本の養成校や現場でどのように伝え、日本人保姆がそれらをどのように受容していったのか。そして今日の日本の保育現場に脈々と受け継がれているものは何なのか。これらを明らかにすることによって、現在の保育者が自らの実践を歴史の中に位置づけることができるような新しい保育史を構築しようとする試みである。なお、連携研究者の荘司氏にはフレーベル研究者の立場から専門的なアドバイスをいただき、海外の研究協力者はその国でのフレーベル主義幼稚園や資料についてのアドバイスをいただく予定である。

先行研究と研究の方法

本研究の基礎となる先行研究として、日本の幼稚園導入史では、田中まさ子（1998）[2]、湯川嘉津美

1）清水陽子・高橋清賀子「イタリアでの教育・保育調査と女子教育への道」前村晃他『豊田芙雄と草創期の幼稚園教育』建帛社，2010，p 319-333.
2）田中まさ子『幼児教育方法史研究』風間書房，1998.

(2001)[3]の研究に始まり、最近では導入期の個々の人物研究が進み、たとえば関信三研究では国吉栄(2005、2011)[4]、豊田芙雄研究では前村晃ら(2010)[5]の研究がある。また本研究で取り上げようとする諸外国への幼稚園導入を研究したものとしては、アメリカの丸尾譲（1989)[6]と阿部真美子(1988)[7]、イタリアのオムリ慶子（1991、2007)[8]等の研究と、ドイツでの養成校の変遷を研究した岩崎次男（1995)[9]、酒井玲子（1995)[10]のものがある。海外の研究では、アメリカへの幼稚園導入研究としてVandewolker, N.C.（1908)[11]やShapiro, M.S.(1983)[12]、イタリアへの幼稚園導入研究としてMacchietti, S.S.（1986)[13]等が代表的なものである。

まずドイツ、アメリカ、イタリア、日本の保育者養成制度や養成課程の変遷の中で、保育者の役割や、保育者養成課程、保育内容、教材がどのように変遷していったかを明らかにする。方法は、文献研究、そして4カ国の養成校や幼稚園などの博物館に残されている養成校学生や子どもたちの折り紙や切紙等の作品、デッサン、ノート等も検証する。そして、日本の幼稚園導入過程を、ドイツ、アメリカ、イタリアの導入過程と比較検討することによって、日本の幼稚園導入の特徴的な変容を導き出し、現在の保育現場の実践に至る道筋を明らかにする。

本年度は8月11日～19日まで、バード・ブランケンブルクのフレーベル博物館館長のロックシュタイン氏の協力の元、フレーベルやその生徒たちが製作した折り紙などの製作物や、当時の貴重な著作物を閲覧し、説明を受けることができた。そこでは日本最初の幼稚園である東京女子師範学校附属幼稚園を指揮した松野クララのドイツ名が今まで日本保育会で流布していたZiedelmannやZidermann、Zitelmannではなく、Zietelmannであるという新事実と、フレーベル存命中の保育者養成課程などをはじめとして貴重な資料を得ることができたが、その整理と分析は今後順次行っていく予定である。

本稿では、今後の3年間の研究の土台として、フレーベル自身が開いた保育者養成所から19世紀末までの養成所の状態、そしてアメリカ、イタリア、日本の各国で幼稚園教育の先鞭をつけたドイツ人教師と各国の保育者養成がどのようであったのかについて、先行研究をもとに大雑把な地図を描くことを目的とする。

1　ドイツの保育者養成所と養成内容

1-1　フレーベル時代の保育者養成

フレーベルが幼児のための保育施設（幼稚園）を思い至る過程については、岩崎の研究[14]に詳しい。直接的なものとしては1839年バード・ブランケンブルグの「遊びと作業の施設」(Spiel-und Beschäftigungsanstalt）と考えられているが、当初この施設は、子どもの保育を目的として設立されたのではなく、保育者養成のための実習施設として開設された。つまりフレーベルは、まず恩物製作から入り、その恩物を普及させるため、恩物を子どもに指導する保育者の養成を行う目的で保育施設を設立したのである。実際フレーベルは1839年、幼児教育者養成試案をまとめているが、子どもにどのように恩物で遊ばせるか、また作業具でどのように作業させるのかの方法が中心的な内容であったし[15]、また、フレーベルの養成所を卒業した幼稚園教師が、その就職した地方都市で恩物の販売も任されていた

3）湯川嘉津美『日本幼稚園成立史の研究』風間書房，2001.
4）国吉栄『日本幼児教育史序説―関晋三と近代日本の黎明』新読書社，2005.『幼稚園誕生の物語―「謀者」関晋三とその時代』平凡社，2011.
5）前村晃他，前掲書。
6）丸尾譲「アメリカの幼稚園運動におけるドイツ人指導者の役割」日本ペスタロッチー・フレーベル学会紀要『人間教育の探求』第2号，1989，p.23-43. 等、アメリカの幼稚園運動に関しての論文は多数。
7）阿部真美子「アメリカ合衆国における幼稚園教育の導入」長尾十三二監修『アメリカの幼稚園運動』明治図書，1988，p.11-24.
8）上野慶子「イタリアにおけるフレーベル法受容についての一考察」日本ペスタロッチー・フレーベル学会紀要『人間教育の探求』第4号，1991. オムリ慶子『イタリア幼児教育メソッドの歴史的変遷に関する研究』風間書房，2007.
9）岩崎次男「フレーベルの幼稚園の設立と幼稚園教育者の教育」岩崎次男編著『幼児保育制度の発展と保育者養成』玉川大学出版部，1995.
10）酒井玲子「19世紀後半のベルリンにおけるフレーベル運動と保育者養成」岩崎次男編著『幼児保育制度の発展と保育者養成』玉川大学出版部，1995.
11）Vandewolker, N.C., *The Kindergarten in American education*, Macmillan Co., 1908.
12）Shapiro, M.S.. *Child's garden : The kindergarten movement from Froebel to Dewey*. University Park : The Pennsylvania State University Press, 1983.
13）Macchietti, S.S., *La Scuola Infantile tra Politica e Pedagogia dall'età aportiana ad oggi*, editrice La Scuola, Brescia, 1986.
14）岩崎次男，前掲書。
15）前掲書，p.130.

例も見受けられた[16]。

一般にフレーベルの功績として、女性保育者の養成と、保育者の資格制度化を通して保育職を女性の専門職としていったことがあげられているが、フレーベルの養成所の1839年の最初の生徒は、男性4人であった。最初の女性保育者イーダ・ゼーレ（Seele, Ida 1825-1901）が卒業したのが1843年、そして1846年には受講生は男性2人と女性6人、1847年の「女性保育者並びに女性教育者のための養成所案」では女性のみを養成の対象とするようになった[17]。養成期間は生徒の経済力や能力によって6か月から2年とばらつきがあったようだが、フレーベルの弟子が行う短期の講習会なども含めると、多様な形態があったようである。中にはすでに外国人の受講生も含まれていたようである[18]。

養成課程科目は、前述の「女性保育者並びに女性教育者のための養成所案」によると、「子どもの発達論、保護と教育の原理、子どもに対する教育的な接し方、唱歌、四肢と感覚の陶冶方法論、恩物の理論と利用法、運動遊びを中心とする体育、植物学と庭での栽培、手技、子どもたちの遊びと作業への参加を中心とする実習」[19]、そして『人間の教育』『母の歌と愛撫の歌』がテキストとして用いられたようである。1849年、マーレンホルツ＝ビューロー（Marenholtz-Bülow, Bertha von. 1810-1893）がリーベンシュタインのフレーベルの養成所の内容について語っているところによると[20]、内容は難しいものであったため若い女子生徒は理解できなかったということや、生徒は理論より実践に役立つことばかり求める傾向があることを述べており、現在の若い学生と共通する点があり興味深い。

では実際フレーベルの下で養成された卒業生たちが、ドイツ各地に散らばって行きどのような保育を展開していたのか。教え子たちがフレーベルにあてた手紙の中で、自分が勤務する幼稚園の様子を書き送っている一例を取り上げてみると以下のようである[21]。

8時	○順次登園 ○園庭で体操の練習 ・鉄棒、吊り棒、吊り梯子（大きな男児のグループ） ・平行棒、跳躍（大きな女児のグループ） ・平均台（小さい子どものグループ）
10時半	○入室 ○朝の集まり（合同） ・お祈り、讃美歌 ・『母の歌と愛撫の歌』から手遊び「親指でひとつ、人差指でふたつ」 ○各部屋に分かれて活動 ・発音の練習（中間の子どものグループ） ・積木、ボール、小歌（小さい子どものグループ）
11時	○（月、木のみ）体育教師による体操指導 （この間は不明）
2時前	○園庭で運動遊び（小さい子どものグループ） ・『母の歌と愛撫の歌』から「ぼうやが君を下へおろしてくれます」「鳩の家」「子うさぎ」「暗い樅の森から」
3時	○読書、または図画、計算（大きな子どものグループ） ・小さい子どものグループは、引き続き園庭での遊びか室内で積み木、球ころがし ○（月・木のみ）大学生講師による宗教の授業（学務局の決まりによって大きな子どものグループに行う）
4時	○降園

16）岩崎次男監修『フレーベル賛歌―子どもと人間の友あての女性たちの書簡』フレーベル館，1991，p. 63-65.
17）岩崎次男，前掲書（1995），p. 135-136.
18）岩崎次男，前掲書（1991），p. 178，p. 306，等。
19）岩崎次男，前掲書（1995），p. 135.
20）マーレンホルツ－ビューロー著，伊藤忠好訳『教育の原点―回想のフレーベル―』黎明書房，昭和47年，p. 21.
21）この日課表は、岩崎次男，前掲書（1991），p. 39-40の幼稚園保育者の手紙から作成した。

これを見ると、フレーベル独自の保育ばかりではなく、身体の鍛錬や言語や算数などの知的教育が入っていることや、いわゆる外部講師による指導が入っていることに驚く。他の幼稚園でも、編み紙の作業の指導をするために、専門の籠編み職人が雇われている例[22]があった。しかしながら身体の鍛錬について考えると、オウエンの理念から乖離してしまった当時の幼児学校での教育や、多忙な親によって家に閉じ込められたままになっている子どもの状態を鑑みると、この時代の子どもたちには「運動遊び」を超えた身体的鍛錬は必要だったのではないか。また、フレーベル養成所の最初の女子卒業生であるイーダ・ゼーレによると、彼女が勤務しているダルムシュタットでは6歳になった子どもに統一試験のようなものがあり、彼女の教え子がよい点を取ることや、その子どもたちが上の学校に行ってからの評判を気に掛ける様子が綴られており[23]、ゼーレだけではなく他の幼稚園教師も、幼稚園では日がな一日自由な遊びばかりではなく、小学校に向けて秩序や規律、そしてある程度の言語や数学の知識を子どもにつけさせるなど、小学校への準備教育としての幼稚園の役割を自覚していたことがわかる。その理由の一つとして、設立間もない、まだ社会的な認知度が低い幼稚園が生き残り発展していくためには、小学校での評価を通して公的な支持や支援を受けなければならない現実があったためと考えられる。

この頃の幼稚園でよくされていたフレーベルの遊びや作業は、運動遊び、唱歌、ボール遊び（第1恩物）、球と立方体の遊び（第2恩物）、積木遊び（第3恩物、第4恩物）、編み紙、折り紙、刺し紙、切り紙、箸並べ、描画などである。『母の歌と愛撫の歌』から子どもたちが好きな歌や手遊び、運動遊びとして挙げられていたものでは、「親指でひとつ、人差指でふたつ」「ぼうやが君を下へおろしてくれます」「鳩の家」「子うさぎ」「暗い樅の森から」「小さな巣」「小かご」「時計」「草刈り」「小さい橋」などである。

このように彼女たちは、体操のほか、描画や編み紙、折り紙などのフレーベルの作業によって、子どもたちに秩序と規律をつける一方で、自由な保育を展開していたことも垣間見ることができる。保育者が恩物遊びのために詩を作って唱えているうちに、子どもたちが自然に調子を付けて歌いだすようになり、その歌を保育の中で楽しんでいる様子や、養成所でフレーベルから教えてもらった方法ではない自由なやりかたで子どもたちに編み紙をさせている様子、また『母の歌と愛撫の歌』では養成校で習ったやり方ではなく、子どもの中から出てきた手指の形で遊びを楽しむなど、保育者たちは日々の保育の中で子どもと関わりながら自由に保育を展開していたことがわかる。

1-2　フレーベル没以降から19世紀末までの保育者養成

1852年フレーベルは没するが、その1年前の1851年に幼稚園禁止令が発布され、1860年に解除されるまでは、ドイツの幼稚園運動は停滞の時期に入る。しかしながら細々とでもフレーベルの遺産を継承して行っていたからこそ、その後の世界に広がる爆発的な幼稚園運動を生み出していったのだろう。

この時期の保育者養成の発展の流れを、酒井の先行研究[24]に拠って整理してみる。

＊1859年、「フレーベル主義幼稚園促進ベルリン婦人協会」（Berliner Frauen-Verein zur Beförderung Fröbelscher Kindergarten 以降「ベルリン婦人協会」と略する）結成。

＊1859年～1863年、フレーベル教育についての講座が開講（講師：ペシェ、ペッペンハイム、マーレンホルツ=ビューロー、ベントハイム、シュバイヘルト）

＊1860年、前述の活動の中から幼稚園教師養成所が開設（1年半の養成期間、内容は、ゼーレまたはクリューガー（Krüger, Amalie）の下で4週間の講義を受けて実習を行う。マーレンホルツ=ビューローの反対で短期間に閉鎖。ザロモン、ダヴィッド、レティヒ、ヴェンケルは卒業生）

＊1862年、ベルリン婦人協会立のセミナーが開催（作業具や恩物を中心に置くカリキュラムではなく、数学、哲学、衛生学、体育などの科目を

22）前掲書，p. 63-65.
23）前掲書，p. 87-92.
24）酒井玲子，前掲書。

開講。ゼーレとクリューガーが作業についての授業を担当）

＊1863年、マーレンホルツ=ビューロー、ベルリン婦人協会を脱退し、同じくベルリンで「家庭および民衆教育協会」（Verein für Familien- und Volkserziehung）を結成

＊同年、マーレンホルツ=ビューロー、1年課程の教師養成所を設立。（科目：『母の歌愛撫の歌』、フレーベルの作業具・遊具の指導、情操や宗教教育、健康や衛生学、園庭の文化や自然に対する知識の直観教育方法、童謡や童話、運動遊びによる身体の訓練。卒業生は1870年までに200人を超え、ドイツ内外の幼稚園で活躍）

＊1870年、マーレンホルツ=ビューロー、ドレスデンに移る

＊1872年、マーレンホルツ=ビューロー、ドレスデンで「全教育協会」（Allgemeine Erziehungsverein）を結成。幼稚園とフレーベル学院（Fröbelstiftung）を設立。

＊同年、マーレンホルツ=ビューローがベルリンに残した「家庭および民衆教育協会」と「ベルリン婦人協会」が手を組み、女学校でフレーベルの幼児教育理論と実際教育をカリキュラム化することについてプロイセン文相に要請する。

＊1873年、ゴータのケラー（Köhler, A.）が「全ドイツ・フレーベル連合」（DeutscheFröbelsche-Verband）を結成。

＊1874年、「全ドイツ・フレーベル連合」の元に、「ベルリン婦人協会」と「家庭および民衆教育協会」が統合され「ベルリン・フレーベル協会」（Berliner Fröbel-Verein）を結成。
（この協会の養成所では、午前は実習、午後は授業に当てられる。入学資格を高等女学校卒。入学試験や卒業試験が難しくなり生徒が減少）

＊1878年、ブライマン（Breymann, Henriette Schrader フレーベルの兄弟の姪、リーベンシュタイン養成所卒）がベルリンに「ペスタロッチー・フレーベルハウス」（Pestalozzi-Fröbelhaus）を設立。（子どもに生活の素材を与え、共同活動の基礎として家庭的作業を展開する授業を行う。）

＊1897年、「ペスタロッチー・フレーベルハウス」は、保育者養成以外に様々な労働のための講座を開くようになり、これ以降は福祉事業を担う施設となっていく。

以上のように幼稚園禁止令解除後には、保育者養成は大きな発展を遂げ、海外に幼稚園指導者として卒業生を派遣している。また卒業生のドイツ人教師の派遣だけでなく、ケラーの養成校では、1872年時点で、ロシア、プロシア、ポーランド、クロアチア、アメリカからの留学生が学んでおり[25]、マーレンホルツ=ビューローの養成校も合わせると、この時期に多くの留学生をドイツに迎えていることがわかる。

2　ドイツ人教師の活躍と各国の保育者養成

2-1　アメリカ

アメリカへの幼稚園導入は、ドイツ人移民がドイツ人コミュニティの子どものために始めたものが最初である。1855年シュルツ夫人（Schurz, Margarethe Meyer. 1833-1876）よって、ウィスコンシン州ウォータータウンに開設された幼稚園がそれである。シュルツ夫人はハンブルクでフレーベルから直接講習を受けており、結婚を機に渡米した。

その後、1858年フランケンブルグ（Ftankenburg, Caroline Louise）によるオハイオ州コロンバスの幼稚園、1860年マチルダ・クリーゲ（Kriege, Matilde）によるニューヨークの幼稚園などが開設されるが短期間で閉園された。実際1870年になっても約12園あった幼稚園のうち11園がドイツ人教師によるドイツ語幼稚園であったという[26]ことからも、ドイツ人コミュニティ以外におけるドイツ人による幼稚園経営は厳しかったようである。

英語による幼稚園に多大な貢献をしたのは、ピーボディ（Peabody, Elizabeth Palmer. 1804-1894）である。ピーボディは、1859年のシュルツ夫人との出会いや、ヘンリー・バーナード（Henry Barnard）の報告書「教育制度と教材の国際展示会」（International Exhibit of Educational System and Materiales）などを通して幼稚園に興味を持ち[27]、

25）オムリ慶子「イタリアにおける幼稚園導入期の一様相―A, ピックと女性活動家をめぐって―」日本ペスタロッチー・フレーベル学会紀要『人間教育の探求』第24号，2012，p. 15.
26）バンデウォーカー著，中谷彪監訳『アメリカ幼稚園発達史』教育開発研究所，昭和62年，p. 20.
27）前掲書，p. 13-14.

1860年ボストンに最初の英語幼稚園を開設する。その後1867年ヨーロッパに渡り、マーレンホルツ＝ビューローやフレーベル夫人らからアドバイスを受けたり、幼稚園の視察を行ったりした。この時ピーボディはドイツ人教師の引き抜きを行い、以降ピーボディはドイツ人教師による保育や保育者養成を進めていった。ピーボディの招きによってアメリカにわたり教員養成所を開いたドイツ人教師には、前述のクリーゲ、そしてエンマ・マーウエデル（Maewedel, Emma. 1818-1893）、マリア・ベルテ（Boelté, Maria Kraus. 1836-1918））がいる。

マーウエデルの養成所カリキュラムは、「フレーベルの幼児教育、恩物と作業に関する原理と実践に関する原理。幼稚園における指導助手。作文の作成。〈人間の道徳的、知的、身体的発達に関する科学〉の連続講義。課題図書はフレーベルの教育学に関するもの、マーレンホルツ＝ビューローのReminiscences of Froebel と Education through Work、ピーボディの教育に関する論文、ペスタロッチーの教育学に関する論文、ハーバード・スペンサーの教育心理学、セガンの教育論、カーペンターの Mental Physiology、ハクスレーの Physiology and Hygine、ヘンリー・バーナードの幼稚園と児童文化に関する論文集など」[28]であった。

バンデウォーカーによると、幼稚園が認知度を高め普及していく転機になったのを、1876年のフィラデルフィア万博であるとしている[29]。フィラデルフィア万博の小学校実践で、図画と手工の教育の有益性が認められたことによって、早くから描画や手技を行っていた幼稚園への理解が進んだというのである。 バンデウォーカーは、アメリカの幼稚園運動を2期に分けているが[30]、前期がシュルツ夫人の最初の幼稚園からフィラデルフィア万博までとしているように、フィラデルフィア万博がアメリカの幼稚園運動におけるターニングポイントととらえていることがわかる。

後期は1880年以降の拡張期であるが、この時期、幼稚園と養成校が増えるだけでなく、幼稚園協会の設立が相次いでいる[31]。これに目を付けたのがキリスト教会であり、幼稚園を布教の手段として行くようになった。つまり、「子どもの成長を教会生活に密接に結びつけ、未来の教会の支持者を教育する」[32]のである。これについてジャドソンは（Judson, Edward）は、“The Institutional Church”に興味深い言葉を綴っている。この時期の膨れ上がる多国籍の多宗教移民に福音を伝える手段として、「最も有効な手段は‥‥幼い子どもの手に握られている」とし、日曜学校を評価しつつも一週間に一度だけでは不十分として次のように言っている。「‥‥３歳から７歳の子どもを収容する幼稚園を教会に設置させるのである。公立学校に入学しきれないほど多くの子どもがいるため、教会が毎日、彼らを集めるという幸運な機会がある。幼稚園の独自の魅力的な教育内容によって子どもの心身を教育するのみでなく、イエスの生涯について毎日少しずつ語り、子どもたちにキリスト教の祈りと讃美歌をも教えることのできる信心深い、訓練を積んだ教師を、教会は雇うべきである。」[33]

以上のように1880年代のアメリカでは、ミッション系幼稚園の設立だけでなく、毎日の保育の中でいわゆるキリスト教保育を行うことのできる保育者の養成が盛んになったであろうことが推測できるが、現在はまだ文献的・実地調査ができていない。実地調査は2016年度に行う予定であるが、1887年（明治20年）以降、このようなキリスト教女性宣教師の来日が増加し、キリスト教伝道とともにミッション系幼稚園と保姆伝習所を日本各地に開設していったのである。

2-2　イタリア

イタリアへのフレーベル幼稚園紹介は、1850年代末から始まるとされている[34]。1857年までにベルナルディ（Bernardi, Jacopo 1813-1897）神父によるフレーベル・メソッドの紹介と、サッキ（Sacchi, Giuseppe 1804-1891）神父によるマーレンホルツ＝ビューローのフレーベル回想録についての紹介が主

28）丸尾譲，前掲書，p. 26.
29）バンデウォーカー，前掲書，p. 5-6.
30）前掲書，p. 7-8.
31）前掲書，p. 52.
32）前掲書，p. 76.
33）前掲書，p. 74.
34）この節については、オムリの前掲書（2012）、および「イタリアにおける幼稚園導入期に関する研究―コロミアッティ位置付けの試み―」関西学院大学『教育学論究』第５号（2013）、p. 55-64を参照した。

なものである。当時はまだイタリアは国家統一がなされておらず、イタリア統一運動の中心的役割を担ったピエモンテ政府が、ライネーリ（Rayneri, G. A. 1810-1867）神父を幼稚園視察のため外国に派遣するなどして、幼稚園についての積極的な情報収集に努めていたことが伺える。そして1861年のイタリア統一後、新政府は活発に政府の要人をドイツやスイスの幼稚園視察に派遣し、実験的な実践も始めるようになっていた。

イタリアの本格的なフレーベル幼稚園の導入は1869年から始まるが、レーヴィ（Levi della Vida, Adele 1822-1915）がヴェネツィアに1869年11月に開園した「聖使徒幼稚園」であり、ヴェローナの女子師範学校附属としてコロミアッティ（Colomiatti, Michele）が同年12月に開設した幼稚園であり、1871年ヴェネツィアに開園したピック（Pick, Adolfo 1829-1894）の「ヴィットリーノ・ダ・フェルトレ幼稚園」である。

その後イタリアにおいて幼稚園は実証主義教育者たちからその実践面が評価され、1880年代に大きな広がりを見せていくが、イタリアにおいてもドイツ人教師の活躍は目覚ましいものがあった。

まず、最初の幼稚園を開設したレーヴィは、ドイツ語に堪能であったピックの助けを借りて、マーレンホルツ=ビューローのアドバイスを受けながら開園準備を進め、ベルリンのマーレンホルツ=ビューローの養成校出身のフレーリッヒ（Fröhlich）を園長として派遣してもらっている。フレーリッヒは、イタリア語が堪能であったが、レーヴィやピックらがイタリアに招聘するドイツ人教師に、イタリア語能力を必須条件としていたため、その後のドイツ人教師の派遣は思うように進まなかった。それでも、ザロモン（Salomon, Elisabetta）やベルドゥシェック（Berduscheck, Marta）をはじめフィレンツェ、ピサ、ローマ、ナポリなどイタリア各地の主だった都市に、マーレンホルツ=ビューローは卒業生を送り出している。

イタリアの養成校は、師範学校から夏休みなどに開かれる短期のコースまでさまざまであったようである。師範学校のカリキュラム詳細については、詳しい文献を今のところ発見できていない。イタリアにおいて、幼稚園導入研究は進んでおらず、導入期そのものの研究論文は存在していないのが現状である。ピックは、独自の養成校を持っておらず、あちらこちらの師範学校で講師を勤めていたようであるが、詳しいことはわかっていない。一方でコロミアッティが校長を務めるヴェローナ女子師範学校では、フレーベル主義幼稚園教師の養成を組織的に行っていたようであり、ここで行われていたコロミアッティ独自の〈教育システム〉（Sistema pedagogico）を中心とするカリキュラムによって、イタリア教育同盟（Lega Italiana d'Insegnamento）の後援を受けイタリア中の教員養成に影響を与えたとされている。したがって、これがこの時期の保育者養成の要になってくると思われるため、この養成課程の詳細を今後明らかにしていく必要がある。

1880年代では、ナポリの幼稚園教員養成校で、ペーターマン（Petermann、Francesca）、シュワーベ（Schwabe）、ダックマン（Dacmann）、といったドイツ人教師が活躍していたことがわかっており、当時のイタリア実証主義教育者との書簡集から、ドイツ人教師の活躍も今後明らかにしていく必要があると考えている。

2-3　日本

日本への幼稚園導入については、湯川の研究[35]に非常に詳しく、それによると、1871年（明治4年）の岩倉使節団随行の田中不二麿による海外幼児教育事情の報告書や、1873年（明治6年）ウィーン万博視察団によってオーストリアの童子園（Kindergarten）が日本に紹介されたのが始まりとしている。

そして、田中不二麿の尽力により1876年（明治9年）日本に最初の幼稚園、東京女子師範学校附属幼稚園が開設されるが、同年田中は文部省から派遣されフィラデルフィア万博での幼稚園視察や、セントルイスそしてボストンの公立幼稚園を含む幼稚園を視察したこと、ウィリアム・T・ハリス等その地での要人との接触があったため、アメリカのからの影響が強いと考えられている。

そのほかにも、文部省刊行の『教育雑誌』にアメリカの幼稚園に関する情報が多かったことも事実であるが、湯川の丹念な資料調査により、興味深いことが明らかになった。それは、この『教育雑誌』の

35）湯川嘉津美，前掲書。

前身の刊行物である『文部省雑誌』の1874年（明治７年）第27号に掲載された米国教育寮年報書抄訳「幼稺園ノ説」に紹介されている幼稚園の日課についてである[36]。従来の研究では、このアメリカの年報に紹介された日課がアメリカの幼稚園の日課として、東京女子師範学校附属幼稚園の日課に影響を与えたとされていたが、これがドイツの幼稚園の日課であることが明らかになったのである。また、東京女子師範学校附属幼稚園で主任保姆を務めた松野クララ（クララ・ツィッテルマン）が、当時の日本人保姆豊田扶雄と近藤濱にドイツ流の恩物と作業の方法を伝授していたことからも[37]、日本最初の幼稚園初期はドイツ色が濃かったことが言えるだろう。

その後各地で幼稚園設立の動きがあり、1881年（明治14年）時点でわずか７園であったのが[38]、1887年（明治20年）には官公立53園、私立14園合わせて67園に増えたことからも[39]、日本の幼稚園導入はアメリカに比べて非常にスムーズであるように思える。その要因として、明治期という西洋文化を吸収することに積極的であった時期であるということと、日本の場合はアメリカやイタリアと違い、国や公が幼稚園設立の先陣を切ったということがあげられるのではないだろうか。

明治20年以降キリスト教女性宣教師が多く来日するようになり、ミッション系の幼稚園や保育者養成所が設立されていく。

前述したように、アメリカでは、幼稚園を布教のツールとし、アジア布教の要となる日本に宣教師を送り込むという思惑があったらしい[41]。官立や公立の保姆養成課程が５か月から１年であったのに比べ、ハウの設立した頌栄保姆伝習所が創設当時から２年間の課程で質の高い養成を行ったため、その後の日本のミッション系保育者養成校の模範となっていった[42]。頌栄の次に広島女学校保姆師範科を開設したゲーンズも、２年間の養成課程を取り入れている[43]。当時の頌栄保姆伝習所で行われていた養成課程は、修身、教育学、心理学、理科（動物、植物、磺物、生理、衛生についての講義と幼児への教授方法）、保育法（恩物による保育方法の講義と頌栄幼稚園での実習）、唱歌、音楽（楽器の習熟）、作文であった[44]。このようにして日本に派遣された彼女らは、母国アメリカの宣教組織のバックアップのもとで、着実にアメリカ式フレーベル主義を広めていったのである。

おわりに

以上のように、今後３年間の研究の方向性を確認するために、先行研究をもとにその道筋のスケッチを試みた。そこから見えてきたことは、ドイツ人教師を通してのアメリカやイタリアへのフレーベル幼稚園やフレーベル式保育の広がり、そして日本への広がりの一つの大きな潮流がミッション系の保育者養成機関であったことである。

フレーベルがまさしく、歴史的なものから新しいものは出てくるとして、過去・現在・未来は三位一体であると考えていたように、未来の保育を描くた

明治期のミッション系保育者養成所[40]

設立年月	場所	旧名称	現名称	創立者
明治17年	東京	桜井女学校幼稚保育科	廃校（明治29年頃）	ミセス・ツルー
明治22年	神戸	頌栄保姆伝習所	頌栄短期大学	ミス・ハウ
明治28年	広島	広島女学校保姆師範科	関西学院大学	ミス・ゲーンズ
明治31年	名古屋	柳城保姆養成所	柳城女子短期大学	ミス・ヤング
明治35年	東京	東京保姆伝習所	東京保育女子学院	ミス・ファイフ
明治38年	長崎	活水女学校保姆師範科	廃科	ミス・コーデ
明治39年	上田	梅花保姆伝習所	東洋英和女学院大学	ミス・デオルフ

36）前掲書，p. 134.
37）前掲書，p. 179.
38）前掲書，p. 243.
39）日本保育学会『日本幼児保育史』第二巻，昭和43年，p. 15.
40）この表は、日本保育学会『日本幼児保育史』第一巻および第二巻（昭和43年）と、文部省『幼稚園教育百年史』ひかりのくに（昭和54年）を参考に作成した。
41）バンデウォーカー，前掲書，p. 89.
42）文部省，前掲書，p. 86.
43）日本保育学会，前掲書第二巻，p. 253.
44）文部省，前掲書，p. 87-88.

めには現状の把握だけにとどまらず、過去の保育をも真摯に見つめていかなければならないということだろう。

今後の研究の方向性として今後明らかにしていく必要があるものは、

① 海外に多くの卒業生を送り出した1860年代から1890年代のドイツの保育者養成課程と保育内容がどのようなものであったのか

② 豊田扶雄が東京女子師範学校附属幼稚園退任後、どこでどのような影響を受け、どのような内容を各地の保育者養成で広めていったのか

③ ハウやゲーンズをはじめ、アメリカ人宣教師たちがアメリカでどのような養成課程を受け、どのように日本に伝えたのか

ということであると考える。

参考図書

阿部真美子「アメリカ合衆国における幼稚園教育の導入」長尾十三二監修『アメリカの幼稚園運動』明治図書，1988.

岩崎次男監修『フレーベル賛歌―子どもと人間の友あての女性たちの書簡』フレーベル館，1991.

岩崎次男「フレーベルの幼稚園の設立と幼稚園教育者の教育」岩崎次男編著『幼児保育制度の発展と保育者養成』玉川大学出版部，1995.

上野慶子「イタリアにおけるフレーベル法受容についての一考察」日本ペスタロッチー・フレーベル学会紀要『人間教育の探求』第4号，1991.

オムリ慶子『イタリア幼児教育メソッドの歴史的変遷に関する研究』風間書房，2007.

オムリ慶子「イタリアにおける幼稚園導入期の一様相―A, ピックと女性活動家をめぐって―」日本ペスタロッチー・フレーベル学会紀要『人間教育の探求』第24号，2012.

オムリ慶子「イタリアにおける幼稚園導入期に関する研究―コロミアッティ位置付けの試み―」関西学院大学『教育学論究』第5号，2013.

酒井玲子「19世紀後半のベルリンにおけるフレーベル運動と保育者養成」岩崎次男編著『幼児保育制度の発展と保育者養成』玉川大学出版部，1995.

日本保育学会『日本幼児保育史』第一巻，昭和43年。

日本保育学会『日本幼児保育史』第二巻，昭和43年。

バンデウォーカー著，中谷彪監訳『アメリカ幼稚園発達史』教育開発研究所，昭和62年。

前村晃他『豊田芙雄と草創期の幼稚園教育』建帛社，2010.

マーレンホルツ－ビューロー著，伊藤忠好訳『教育の原点―回想のフレーベル―』黎明書房，昭和47年。

丸尾譲「アメリカの幼稚園運動におけるドイツ人指導者の役割」日本ペスタロッチー・フレーベル学会紀要『人間教育の探求』第2号，1989.

文部省『幼稚園教育百年史』ひかりのくに，昭和54年。

湯川嘉津美『日本幼稚園成立史の研究』風間書房，2001.

Macchietti, S.S., *La Scuola Infantile tra Politica e Pedagogia dall'età aportiana ad oggi*, editrice La Scuola, Brescia, 1986.